

ゴンザレス氏発表へのコメント

岡田 泰平（東京大学大学院総合文化研究科教授）

今日発表された原稿も大変興味深かったんですけど、長いスパンで見たゴンザレス先生のご研究についてもお聞きしたいと思います。多分、私が一番初めにゴンザレス先生の論文読んだのは、*Militarized Currents* (2010) という本の1章だと思います。その後 *Making the Empire Work* っていうダニエル・ベンダーとジャナ・リップマンの本の1章で、ハワイのレイという首飾りを売る労働者の話をされてます。その後ゴンザレス先生の1つ前の著書である *Securing Paradise* を結構前に読みました。



私はフィリピン研究をやっていて、どちらかといえば社会史研究です。ゴンザレス先生の方はいわゆるアメリカン・スタディーズという分野のものだと思います。これは分かりやすく言うと、アメリカ発のカルチュラル・スタディーズですね。日本でも1990年代終わりから2000年代始まりの頃にかけては、「カルスタ」と呼ばれる学術が盛んでした。

端的に社会史とアメリカン・スタディーズの違いを言うと、社会史や歴史学一般は、時間軸に沿って変わってきたことを説明する学術です。逆に言うと、変化がないことはなかなか歴史学だと説明できないんです。ゴンザレス先生の論述は、そうではなく、むしろ大きい現象を説明するのに適した方法です。ゴンザレス先生の文章は、どれもすごく読ませるもので、単純に面白いです。

歴史学だとよく理詰めの議論になります。ここの歴史をもっと細かく見ていくと、こういうような現象がある、というような論述です。ゴンザレス先生の論述は、新しい発想への着眼点という点において優れています。ですので私のゴンザレス先生へのコメントは、あくまでも異なる学術からということ、ややベタな歴史研究からの質問になります。

まず初めに全体像というか、ゴンザレス先生の論述のやり方についてご質問させていただいて、その次に今日ご発表いただいた内容について質問させていただき、そして最後の方でまた大きめの質問をさせていただければと思います。

まず1つ目はいわゆる方法論についてです。社会史から見て、とかくカルチュラル・スタディーズ系の議論というのは象徴的なことを取り上げて論じるというイメージがあります。それに対して、ゴンザレス先生は資料を探し出してくる能力がすごく高く、ゴンザレス先生が探し出してこられた資料については、結構感銘を受けます。

例えば、こちらの *Making the Empire Work* の本ですと、レイを売っている労働者のオーラルヒストリーが分析されていて、端的に言って面白いんですね。こういう対象はハワイの外だとほとんど知られておらず、そういうことちゃんと書かれてることは素晴らしいと思いました。今回のクーバーについての本はKindle版だと大体31ページぐらいに書いてある文献が面白かったですね。20年代、30年代のフィリピンの女性観について書いている興味深い文献がいくつか挙げられています。

賛辞はこれくらいにしてももう少し本質的なことを言いますと、こちらの *Securing Paradise* とか、クーバーに関する一冊本だと、ある時代のことを語っている時に、その時代に属さないような事象をぱっと入れてしまっている箇所があります。例えば相当過去に起きたことともっと後に起きたことを、共通の時代のように論じています。

別に社会史や歴史研究ではないのでいいと思うのですが、そういう叙述の仕方をする、特定の時代にこういうことが起こり、次の時代にはこう変わったというところが捉えづらくなります。つまり、非歴史的な論述になりがちなのですが、1つ目の疑問としては、こういう論述のスタイルを取る理由をゴンザレス先生にお聞きしたいと思います。

ここからは今日の発表についてですが、クーバーという人を取り上げて、親密さに関する研究をして

います。ゴンザレス先生がおっしゃられた言葉で興味深かったのが、ケアをする仕事、ケアワークという表現です。アメリカ人の研究でも日本の研究でも、ケアワークっていった時に大体論じられるのが、例えば看護師や、介護職ですね。あとはドメスティックワーカー（家事労働者）なども含まれます。

この分野ですと、看護師の国際移動の話を取ったキャサリン・チョイの *Empire of Care* という本が思い浮かびます。そういう対象ではなくて、なぜあまり成功していないようなエンターテイナーをこの文脈で注目しようとしたのかをお聞きしたいと思います。

ダグラス・マッカーサー自身は日本でも相当な有名人です。クーバーは、彼の愛人で最後には自殺してしまう、悲しむべき最期を迎えてしまう人です。忘れられているから、その人を取り上げるというのは、それなりの理由にはなるとは思いますが、もう少し踏み込んで、なぜこの人を取り上げるのかという理由をお聞きしたいと思います。というのは、この時代代表するようなフィリピンの女優というわけでもないですし、後半部分になるとだんだん映画論になります。なんでこの女優なのでしょう。

あとは、この時代のアジア系女性の表象の中での彼女の位置づけも気になります。クーバーが活躍した1940年代のフィリピン人とアメリカ軍との関係の文脈では、彼女はどのように位置づけられるのでしょうか。日本の文脈では、アジア・太平洋戦争直後の研究、いわゆる占領期研究はとても分厚いわけです。特にそこでの女性史の研究はとても多く、その側面から見るとフィリピンの側の戦後直後の歴史は、さほど盛んではありません。共産主義者のフク団がどうやって弾圧されてきたかという以外の歴史はあまり書かれていないイメージがあります。

他方、フィリピンでのフィールドワークの中でこの時代のことを聞くと、フィリピン人女性の話は少なくありません。よく言われるのがハンガン・ピアールン（波止場まで）という表現です。要するにアメリカ人の兵隊さんと仲良くなったフィリピン人の女性が波止場まで行くのですが、彼女を残し、アメリカ人はそのままアメリカに戻ってしまうことを指します。クーバーの場合、アメリカに行くわけですが、こういう文脈から見ると、フィリピン社会でこの人は、どういうふうに捉えられていたのでしょうか。

逆にアジア系女性でアメリカに行った人たちに関しては、日本社会にいると米兵の妻としてアメリカに行った人たちの語りは大量にあります。英語文学でよく知られているのだと、パウル・S・バックの『隠れた花』(The Hidden Flower) という小説があります。アメリカに行った日本人女性が人種差別に遭うんですが、最後は混血の息子を出産するという話です。そういう事例と比べると、クーバーは、どういうふう位置づけられるのでしょうか。

また、ケアワークとエンターテイナーという文脈はフィリピン史とも深く関係してきます。マニラ戦はほんとに破壊的な戦闘で、マニラの市街地が相当変わりました。例えばエルミタやマラテだと、以前だと高級住宅地だったところが、戦後には赤線地帯になってしまいます。そういう変化とこの人が生きていた背景というのはどういうふうにつながってくるのでしょうか。1940年代のフィリピン人女性のことを語る上で知りたいと思います。

表象研究の立場からも先生のご発表はとても興味深いです。お見せ下さった一シーンでは、タガログ語で Ang Tatlong Hambog と書いてあります。こういうタガログ語はちょっと難しいのですが Tatlong というのは3です。Ang っていうのは主語を表す言葉です。Hambog が難しいですね。タガログ語だと Mayabang という意味のようで、「傲慢」という意味です。だけど Hambog は、英語からの転訛かも知れない。そうだとすると、英語の humbug はスペルが違いますが、その意味は「偽物」です。この文脈で、タガログ語の Hambog は何を意味するのか、あんまりよく分からないんですが。

また、この映画でキスシーンが出てくるわけですが、キスしている男性のほうはフィリピン人でしょうか。そしてキスされているクーバーの方も、フィリピン人ということなのがよく分かりません。フィリピン人同士がキスしているのでしたら、それが問題になるのはなぜなのでしょう。これはアメリカの文化史だと結構重要な問題で、映画で白人と有色人種がキスするなんてことは、1920年代だったらまずあり得ません。異人種間のキスがたぶん可能になるのは、映画ではちょっと分からないんですが、テレビドラマだと恐らく1960年代です。皆さんもご存じかもしれませんが、SFの「スタートレック

ク」の黒人と白人がキスするシーンが初めてだと思います。

だから先ほどキスして問題になったと言われていたのですが、キスしたことそのものが問題だったのか、違った人種の人たちがキスしたことが問題だったのか、そこがいまひとつよく分かりませんでした。

人種の違いが問題だったとすると、クーパーは、どういう人種として思われていたのでしょうか。日本人は、フィリピン人はみんな一緒だと思うかもしれませんが、アメリカの文脈で言うとアジア人か白人かでは圧倒的に違います。表象も違うし、法律上の区分も違います。

法律上の区分で言うと、ゴンザレス先生のご発表を聴いて、クーパーはアメリカに帰化できなかったのかなと思います。もしくは、少なくとも彼女はフィリピン人としてアメリカ移民局の対象になっているのではないのでしょうか。アメリカの移民関係の文書で移民の個別ファイルを見ていくと、そこに肌の色とか書いてあります。

ダグラス・マッカーサーがクーパーのことを捨てていいフィリピーナと思っていたということですが、彼は彼女のことをアジア人だと思っていたのか、フィリピンにいる白人だと思っていたのかも興味深いところです。今でもそうだと思いますが、アメリカ特有なこととして、とにかく人種のポリテクスがつく社会なわけですね。その文脈でこの人がどういうカテゴリーに押し込まれていたのか、それが果たして変わっていったのか、変わらなかったのかということが知りたいです。

あともう一つ興味深いのは、クーパー自身は端役なので作中でその後どうなったのか分からないですけど、アメリカの映画史で重要な議論があると思いますが、キスしたりロマンスになるのはいいのかもしれないけど、より深刻なのは子どもができた場合です。というのも、子どもが混血になるからです。混血の子どもが生まれるというのは、白人優先の社会においては結構スキャンダラスです。

こういう問いの延長として、そもそもアジア系の人白人として表象されることっていうのがあるのか、という点があります。というのは黒人研究の中では重要な問いですが、1920年代から肌の白い黒人が白人として演劇などで活躍するということが結構あります。パッシングって呼ばれますが、アメリカ史の文脈からいうとクーパーの事例は、アジア系のパッシングの事例なのでしょう。

また違った論点から見ると、クーパーは、フィリピン社会と切り離された人ですよ。だから、少なくとも僕みたいに日本占領期のフィリピンのことを研究している人間からすると、この人の親族から聞いた日本占領期の語りはどうだったのかなと疑問が湧きます。それがこの人に対してどういう影響力を持ったのか。例えばマニラに家族がいて、まだいろいろと連絡があるようだったら、家族はやはり相当悲惨な運命を辿ったのではないのでしょうか。そこら辺の語りも知りたいなと思いました。今日のご発表に関しては、おおよそ以上です。

また先生の学術研究の全体像の話に若干戻りますと、先生のご研究通底するものとして、帝国 (Empire) とか入植者 (settler) という言葉が前面に出てきます。前著の *Securing Paradise* ではハワイが軍事化されるのと同時に、なぜ観光化されていくのかという問いに取り組んでいらっしゃいました。そこからなぜ忘れられたフィリピン人エンターテイナーと帝国というテーマに関心が移ったのかをお聞きしたいと思いました。単純にある研究者、ある知識人の関心が、一つのテーマからもう一つのテーマに移る過程に興味を覚えます。

もう一つは、先生がこういうテーマに関してご研究をされていて、しかもハワイという場所で教えられていることですね。*Securing Paradise* ではアジア系がハワイに行って住み着くことを、「入植者」と呼んでいるわけですよ。いわゆる「入植者植民地主義 (settler colonialism)」とすごく親和性が高い議論されていると思います。

アメリカン・スタディーズを实践されている方として、ハワイ社会をいわゆる「入植者植民地」(settler colony) だと思われているのか。そう思っているのであれば、そういう歴史的な文脈と現実に対して、どういう形で研究と教育を实践されようとしているのかもお聞きしたいです。いろいろとぶしつけな質問をして恐縮ですが、どうぞよろしくお願いします。以上です。